

戦争体験を語り継ぐ シリーズ②



中山 真弓さん
(熊本市東区在住)
88歳

私は昭和9年に熊本市花園に生まれました。父は海軍の軍属、母は専業主婦で5人兄弟の真ん中です。開戦してから小学校で勉強をした記憶はあまりありません。4年生くらいからは時々、女子は近くの農家で畑仕事の手伝い、男子はアカマツから松脂をとる作業をさせられました。毎月23日に本妙寺で加藤清正公に戦勝祈願に学校から歩いて行ったこともおぼえています。

お国のためにと橋の欄干をはじめ、あらゆる金属が抛出させられました。家にあった仏壇の「おりん」も持って行かれました。昭和19年11月、家のすぐ近くで爆弾が落ちました。熊本市ではじめての2発の爆弾だったため、爆弾の跡形に市内からも見学がありました。その爆弾では友達のお母さんが亡くなりました。

熊本市内から疎開してくる児童が多数いて、60人クラスでした。いつもおなかやすいていました。大豆をしぼった油カスにメリケン粉をいれて焼いたものはとてもおいしかったけど、ものすごい腹痛になったことをおぼえています。着るものも食べるものもありませんでした。母の苦勞はどれほどのものであったかとつくづく思います。小学校時代の楽しかった思い出は秋の遠足で河内にミカン狩りにいったこと、小島に潮干狩りに行き、持ち帰ったあさりの味です。どちらも一度きりです。

小学校5年の時に終戦をむかえました。父はマラリヤで佐世保海軍病院にいて12月に帰ってきました。中学2年の時、父が全身不随になり(今でいうALS:筋萎縮性側索硬化症)病院での介護が必要となりました。家は母がいないといけなかったため、私が父の入院する病院に住み込みで世話をすることになりました。それから学校には当然行けませんでした。最近「ヤングケアラー」という言葉を知りましたが自分がまさしく

それでした。「自分の人生は苦しいことばかり」「なぜ生きていなければならないのか」そんなことばかり考えていました。そのころ、姉から“人生手帖(※)”をすすめられて購読しました。この本にはずいぶん救われました。それからうたごえ運動にも出会い、読者会や平和活動にもかかわるようになりました。

3人の子どもにも恵まれましたが、自分の半生を振り返るとき、一番学びたかった時期を戦争によって奪われたことを今でも悔しく思います。今のウクライナの人々のことを思うと胸が張り裂ける思いです。戦争や戦争につながる一切の動きに対し、心からの「No」を声の限り訴え続けたいと思います。



草野 澄子

※高校などに進学できなかった青少年層に向けて書かれ、「いかに生きるべきか」を主題とした。そこでは、「生きていくとうとさ」(『人生手帖』1955年9月号)や「人生生きるに価するや」(『葦』1957年5月号)といった特集が、毎号のように掲げられた。読者投稿が主ではあったが、柳田謙一郎、小田切秀雄、真下信一ら知識人による哲学・文学・社会批評の論説も、ほぼ毎号掲載されていた。読書案内が示されることも多く、平易な人生論のみならず、文学や哲学、マルクス主義系の文献も紹介された。

【戦後史大事典・三省堂より 1991年】

「第39回くまもと健康まつり」

第39回くまもと健康まつりは、快晴のなか5月8日(日)に熊本市の学校法人九州学院敷地内のブラウン・メモリアル・チャペル内で開催しました。くまもと健康まつりは新型コロナウイルス感染症拡大により2020年より2年間開催出来ませんでした。今年が通常の形ではないものの「食料物資配布会&健康チェック・生活相談会」という形で開催し、用意した300袋のうち290袋の物資を配布することが出来ました。物資提供のよびかけに会員さん、地域の方々はじめ、賛同団体から米800kg、マスク200箱(50枚入り)、ジュ-

ス300本、南関揚げ、生鮮野菜、ミカン、生理用品、茶葉、トイレットペーパー、レトルト食品など様々な物資が寄せられました。募金は14団体・24個人から合計428,096円が集まりました。来年の第40回健康まつりは江津湖の地で、本来の目的である「健康人だけでなく、病氣療養の人も、障がい者も安心して参加できるまつり」「参加者が健康を楽しみながら体を動かし、快い疲労感の中で健康について自覚を高める」「楽しさも、知恵も力(金)も持ち寄ってみんなで作る手づくりの市民のまつり」を開催したいと願っています。



会場となった九州学院の教会



開会前の打ち合わせ風景



開会直前準備完了



受付では手指消毒と検温



米は2キロにずつ小分け



教会内では支援物資配布



血圧測定



仕切られた相談コーナー



教会の外では生鮮食品も配布